

物の言葉ではありません。

ただ仏の「慈悲」という言葉には「愛」とだけでは表せない、深い意味、ことに「悲」には含まれています。それゆえ、仏教では慈悲という言葉が通常使われています。しかし、「阿弥陀仏は愛である」と言っても何らさしつかえはなく、現代ではこの表現の方が人に伝わりやすいのかも知れません。

ただ愛光の「愛」は、仏教で言う愛執、愛欲、貪愛、欲愛という、いわば悪しき執着という否定的な意味での愛ではありません、純粹な慈悲であり慈愛であります。

「慈光はるかにかぶらしめ」で、阿弥陀仏の慈悲の心光ははるかかなたからこの私に、はるかなる過去からこの私に、かぶらしめられ、そそがれ続けられてきたのです。

はるかかなたからからというのは、宇宙空間の遠い彼方からというのではなくて、迷いと苦しみの領域を超えた覚りの領域、いわば「お浄土」から照らしたもう慈光でありましょう。凡夫の私の手の及ぶ世界からではなくて、私たちの濁世を超越した浄らかなさとの領域からの光という

ことで、「はるか」なる世界であるお浄土からの光といえましょう。

超越的世界からという意味では、お浄土は凡夫にとつてはるかに遠く離れていると言います。『仏説阿弥陀経』には「これより西方に、十万億の仏土を過ぎて、世界あり、名づけて極樂（浄土）と曰う」とあります。この十万億の仏土という遠さは空間的距離的な遠さではなくて、迷いと悟りの領域の次元の違いを表された遠さでありましょう。

しかるにまた一方で、『観無量寿経』には「阿弥陀仏、ここを去りたまうこと遠からず」とも説かれていますので、〈如来浄土〉は今ここを離れていないとも仏陀によって説かれています。卑近なたとえでいいますと、自分の背中は、自分では直接見えません。その意味では非常に遠いといえますが、同時に自分にとつて極めて近いといえます。私たちとお浄土の関係もこのような関係ではないでしょうか。

また「慈光はるかにかぶらしめ」というのは、阿弥陀仏の光は十劫の昔から今に至るまで私たちを照らし続けておられると『仏説無量寿経』に

説かれています。そのことを聖人はご和讃で

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫をへたまえり

法身の光輪きわもなく

世の盲冥をてらすなり

と詠われています。十劫という極めて長い間私たちを照らしづめに照らし続けておられる、その阿弥陀仏の慈光が今、照らし下さっているのです。

そこに、どこどこまでも私（たち）を見捨てない、助けずにはおかないという阿弥陀仏の慈悲の深さ、願力の強さが知らされます。「はるかに」照らし続け、喚び続けて下さってきたのであります。

もし人間的な時間単位でイメージするとすれば、十劫の昔から照らしづめということ、は、太陽は地球を照らし続けて数十億年ほどになるそうですが、たとえ一劫でも、数十億年よりずっと長く、私たちが慈光は照らし続けて下さっているといえましょう。

「ひかりのいたるところには」で、慈光が私のところに至り届いて下さる。今この私に届いて下さっている。その用きであり、その大いなる徴であり、現れが、今〈南無阿弥陀仏〉のお念仏となつて

現れて下さっています。有難いですね。はるかなる光が今この私にはからずも至り届いて下さっている、ああ有難いとの感動であります。驚きであります。

では、私のどこに至り届いて下さるのでしょうか。私の心には。

私の存在の、私の生命の中心は心です。肉体ではありません。私の存在は反面は〈物〉です。私の存在は肉体を伴ってしか存在できませんが、私の生命の中心いわば芯は心です。〈芯〉という文字そのものが〈心〉を表しています。ダンマパダ（「法句経」）という經典に釈尊（釈迦）は、「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によつてつくり出される」と最初の二句に仰っています。人生全体、私に起こるすべてのものごとは、心に基づき、心を主としていて、心において人生生活は為されていきま

す。ですから〈私の当体〉は心であります。この心は何によつて救われ、安心し、安定するのでしょうか。心は〈心〉によつて救われるのであります。心は物

質によつて救われると思いがちですが、心が本当に助かるのは〈心〉によつてではないでしょうか。大いなる慈悲（智慧）心によつて助かるのであります。

私たちは物質によつて助けられると言ふことも、本当です。だから物質も大事です。けれども本質的究極的には私たちは心によつて助かるのではないのでしょうか。

物質的条件、いわゆる生活の糧を得るといふ経済的安定、それと物質的肉体的条件としての健康、いわゆるお金と健康は生きていく上で非常に大事なものであります。

けれども、それだけで果たして人は安定し、安らぎ、喜び、まことの幸せを感じることはできるかというところ、そうではないと思ひます。

お金と健康さえあれば幸せだという考えの元にあるのは、「この身体が私である」「この身体を安定させ維持せしめることが一番大事」という考えが元にあると思ひます。生計が不安定になり乏しくなると「食えなくなるのではないか」と不安になり、病気になる。「死ぬのではないか」「病気になる」と生活を楽しむこともできなくなる」という怖れをも

ちます。ですから、身体の安定的な維持にはお金と健康が欠かせません。ですから、この身体が安定的に維持されることこそ一番大事なのであり、そうであってこそ人生は楽しめる)、と思うわけです。

しかし、一番大事と思っっているこの身体(肉体)は無常にさらされています。刻々と変化し、日々老病死が現実化していきます。身体は無常のまっただなかにあります。ですからどれほど「私は大丈夫」と安心していても、心の底には「不安と怖れ」が根をはっています。私たちの心の底には「不安」があり「怖れ」があり、「おののき」があります。私は「結局どうなっていくのか」という怖れがあるのです。そういう怖れや不安が根に張っている心は、物質的な豊かさとか健康などの物質的な条件だけでは安定できない性質のもので、私たちの心はそれだけでは根本的に不安定なものなのです。

ら、物質的な安定を図るとともに、心の根本的な安定を求めることが極めて大事なことになる。

仏の慈悲の心をいただく、たとえ物質的に絶望的な状態(たとえば死ぬような状況)

において、不幸に陥り、嘆きに陥ることはないけれども、物質的な安定のみでは、たとえ巨万の富を得、健康そのものでも、「滅び」(死につつある)の中にあるという根本苦は免れないのですよ、と仏教の祖師方は申されますし、世界の聖賢が等しく言っていることです。聖書に

「人はパンのみによって生きるにあらず、神の口より出ずる言葉によって生きる」とあります。

とありますが、本当ですね。「人はパンのみによって生きるにあらず」ということは、生活の物質的な糧があつてはじめて人は生存できるが、それだけでは人は真に生きることができない、「神の口より出ずる言葉」、すなわち真実の言葉によって本当に生きることができると言われているのでしよう。

仏教では仏の言葉を「金口」と言います。悟りを開かれた仏の口より出ずる言葉、即ち仏の説法の言葉を言います。

真実の言葉を言います。それは黄金のように光り輝く尊い永遠な真実の言葉だから金口といわれるのです。そして仏の言葉の中の言葉、それが南無阿弥陀仏の言葉であります。その言葉が、お念仏となつて私たち一人一人に喚びづめに喚びかけて下さる、阿弥陀仏の仰せのみ言葉なのです。この言葉を聞き、この言葉を受け入れる(信心)ことによつて仏の大悲心は私の心に届いて下さいます。

さてこのご和讃は、大いなる慈悲の心であり大いなる愛の心、その仏心に触れ、この心にであい、この心と離れなくなる、そこにはじめて私たちはまことの安らぎをいただき、喜びを知り、心は安定すると仰せられるのであります。そのことをこのご和讃は教えて下さっています。「ひかりのいたるところには法喜をう(得)るのであります。法喜とは、真実(法)にであった、こわれないまことの喜びであります。

このご和讃を読むとき、学生時代に金子大栄先生のご講義に紹介されていた歌を思い出します。金子先生は次ぎのお歌を他の講演などでもよく

引用されています。

わずかなる庭の小草の白露を求めてやどる

秋の夜の月

遙か遠い天空のお月様の光が、秋の庭の片隅に生えている小さな草の葉の末についている白い露にその月影を全体的に宿している。そういう歌です。

天上の月(無限。アミダ)は万物をへだてなくくまなく照らし、しかも極めて小さな草の葉末についている露(有限、私)に月影(無限)を宿している。

これは真実の無限なるものは、有限なものに無限なるものを表現する、それが真実の無限でありましょう。有限と対立する無限は真の無限ではありません。まことの無限はごく小さな有限なものにとけあい、それ自身を顕わにする。そのまことをこの歌に金子先生は感じられているのでしよう。

広大な仏心大悲(無限)が、有難いことに世界の片隅にうごめいている小さな私を探し求めて、私の方には何も力も徳もないのに、罪濁の私の心

に届いて私と離れなくなつて下さる。はるかなる慈悲の光は、煩惱だらけの私の心に届いて下さり、私を撰取して私の心と一つにとけあつて下さっている、ああ有難いとお心がこのご和讃から感じられます。そこにまことの(喜びと安らぎ)が湧いてくるのであります。

私たちに、大いなる安慰を与えて下さる「大安慰である南無阿弥陀仏」に助けられなさいと、お勧め下さるのであります。

《遠方法話予定》

- ① 二月十四日(十時始)。福井市、福井別院。座談有。
 - ② 二月十七日(十時始)。愛知県刈谷市、法林寺。
 - ③ 三月四日(十時始)。名古屋市、名古屋別院。座談有。
 - ④ 四月一〇日(二時始)・十一日(四時まで)。広島市、龍善寺。
 - ⑤ 四月十七日(十時始)。福井別院。座談有。
 - ⑥ 五月十九日(一時始)〜二十一日福井別院。座談有。
- (詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

木村無相さんの法信

29

(昭和五十八年九月八日のお便りの続きです。無相さん七九歳。往生される四ヶ月前のお便りです)

紀さん、これでも思いあたるではないですか、サダ女の

信じられませんが、ウタガイ晴れません

ソレハイケナイ

信じなさい、

ウタガイ晴らしなさい

とは言わずして、

そのまま

称えるばかりで

お助け

そのホカにナンモ

イラヌぞよ

と、申されたー。

ということ。

ワレワレ凡夫の

信じられたとか、
信じられない、とか、
ウタガイ晴れたとか、
ウタガイ晴れぬ
とかいう
凡夫のココロ
凡夫のオモイ
凡夫の「念」には
用が無いのである。
ただ、大切なことは、
「よき人の仰せ」

と、お念佛申すということが大切なことなのです。

ここで、『観経』の下品下生の次ぎの経

語を、思い出して下さい。下々品のところ

を開いて、読んで下さい。

大切なところ。

「善友告言、汝若不能念者、応称無量寿佛」とある。

善友告げて曰く。

「汝、若し、念ずること能わずば、まさに無量寿仏を称すべし」と。

ここで、善友即ち善知識（よき人）の仰

せに、

「お前、ココロに阿弥陀如来のお徳やお慈

悲やお助けのイワレを思うこと、（念ずる

こと）が出来なければ、

それはそれでよいから、

ただ阿弥陀佛の御名を称えなさい。

ナムアマミダブツ、
ナムアマミダブツ
と称えなさい。
ココロに、念ずること能わずれば、
ただ口に、声に、
称名せよ、
との善知識、「よき人」の仰せ。

○
この『観経』下々品の善友「よき人」の仰せ、
汝若不能念者 応称無量寿佛

「如来の勅命」のまんまに、本願念佛を執るというこ

は、サダ女に

「そのまま称えるばかりでお助け、そのホ

カには、ナニモいらぬぞ」

と言われた香師のオサトシと同じことであ

る。

○
『歎異抄』の第二条、叡山を降りて、法

然上人のモトに教えを求めた親鸞聖人に、

「ただ念佛して、ミダに助けられまいらす

べし」

と、法然上人、「よき人」が申されたと同

じことである。

○
善導大師さまは、第十八願の

乃至十念

のおこころを、よくよくいただかれて、

三心十念

を、

称我名号 下至十声 若不生者 不取正

覚
と「加減の文」としていただかれた、一

これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

○
これは、
『大経』の第十八願の御真意を、
『観経』下々品の
汝若不能念者、
応称無量寿佛
とあるところに、いただいで、
加減の文
ではあるまいか、
称我名号 下至十声
若不生者 不取正覚
のまんまが
三心十念
になっているのである。

【信心夜話】

高校時代に真宗の教えに

惹かれて、大学を選ぶときに、初めは真宗本願寺派（お西）の龍谷大学に入るうかと考えていた。ところがある日、街の書店でたまたま手にした『仏の愛の庭』という仏書をめくっていたときに、次のような言葉にであって強烈な印象を受けた。その言葉は、

「汝はまったく無知無能なのだ。すべては絶対者の計らいのままだ。いま、いきも戻りもならぬといっているが、そのいっていることそのことが、すでに生きている証拠ではないか。しかも自分に生きているという自覚がないのだから、まったく生かされて生きているのである。自力を過信して迷ってはならぬ。汝はまったく生かされて、生き、計らわれて動いているに過ぎないのだ。自力というものに何らの根拠はない。まったく他力のなさしめである。すべてを他力にまかせて、与えられた力一ぱいに生きていけばよいのだ。また、何をなすべきか、いかに生くべきかなどと思わずらう必要もない。ただ何事でも心の欲するところ気にむかうところに従って、それを行なうなら差しかえはない。その行為が善であるか悪であるかを問う必要はない。汝には善悪邪正を沙汰する資格はないのだ。汝の一切の行為に対する全責任は絶対者（如来）が引き受けるのである」

これが「如来の呼び声」であるという内容だった。ここに救いがあるではないかと驚き、著者の佐々木蓮磨師が真宗大谷派の住職さんであると知り、同時に清沢満之師（大谷派の先覚者）を知り、このような言葉が生まるもとを知りたいと思つて、真宗大谷派の大谷大学を選んだのであった。それから五十年、佐々木師のごとく直裁に如来の仰せを説く信力はない。ただ如来のこのお心を「我が名を称えよ」の仰せに味わわせていただいている。

(続く)

